

# 議事概要

## 令和4年度 第1回 新潟市若者支援事業運営協議会

---

日 時： 令和4年9月28日（水） 午前10時00分～正午

場 所： 新潟市万代市民会館 3階 307・308研修室

出席者： 新潟市若者支援事業運営協議会委員

伊藤委員、田村委員、辻村委員、丸田委員、渡邊委員  
事務局

地域教育推進課長ほか7名

傍聴者： なし

---

### 1 開会

### 2 地域教育推進課長あいさつ

### 3 委員自己紹介

### 4 委員長及び副委員長の選定

### 5 議事

#### (1) 昨年度末までの協議について

#### (2) 前回の論点の要旨について

#### (3) 令和3年度の事業報告及び令和4年度の事業実施概要について

#### (4) 意見交換

(田村委員) 利用者の数について、今のスタッフで対応している分がちょうどいいのか、倍ぐらいになってもいいのか。どれぐらい多くの方がこの支援を受けられるかということとはすごく大事なことだと思うが、それに対応するスタッフの状況もあるので、これで手いっぱいであるならば、質を高めていくということになる。もっと多くの利用があってもいいということであれば、利用者を増やすようなことができないか。

(事務局) 困っている若者は全員受け入れますというのが前提。ただ、現実として、1件の相談についても、丁寧にやれば、1人について長くなる。相談の内容によっても、長く、深くというのがあるので、一概に言えない。

今来ている部分については、相談スタッフが分担し、隙間時間を埋めながらやっているというのが現状。今のところいっぱいいっぱいという

感じはする。数が少なければ、逆にそれを丁寧にやれる。分析したり、対策を立てたりできる。一方で、困っている人はいませんかとかたちでやっていくという部分も、必要なことと思っている。

(伊藤委員) サポート困難者が増えていて、例えば、中学校を卒業して、ずっと不登校で、その後、特に進路が決まらなかったとか、不登校をやっている、高校に入ったが、結構早めに中退してしまったという若者はたくさんいるなという実感があって、親御さんも困っており、本人も行き場がないというところがある。

そういった若者がどれぐらいいて、どうしているのかということが、小学校、中学校だと一応義務教育なので、学校が把握することができるが、中学校も卒業してしまうと、それが見えなくなってくる。そこを把握して支援につなげていくのが、一つの大事な「オール」の機能と思っている。

(渡邊委員) 相談者にとって、どういう困難性というか、主訴というか、課題をもっているかというところで、支援1から5というふうに支援の大きさとか、必要性なんかを分けてみる。居場所を利用している方で、自分の目的があってここに来て、それをこつこつとやって、ちょっと聞きたいことを聞いて帰られるという方は、もしかして支援としては、困難性としてはそんなに多くない。家庭環境や、若者自身の能力や、これまでの生育の中で抱えている問題等を見たときに、社会で自立していくにはすごく難しい、課題解決をするのは難しいという若者はどれぐらいいるのかというふうに。

もしそれが何か調査分類項目のような、先行研究があれば、そういったものも参考にしながら、利用している若者の状況と支援する側のここは足りているが、ここが足りていないというところが、支援レベルで考えたときに見えてくるかもしれない。その支援レベルによって、つながる、連携する機関がまた変わってくる。そういうふうに何か調査が見られる方法があるといい。

(辻村委員) 集中改革は全市でされており、どの会に行っても当然出てきているので、あくまでも効率的にやるには直営がいいのか、外に出したほうがいいのかというところ、予算の関係も含めてさまざまところでこの議論がなされている中で、こちらがまずはどこからどこまでどんなことをしようとされているのかということと、それからそれぞれされようとしていることが、何に実際、実績としてつながったのか。

さらに、ここの部分が足りていないから、ここを強化したいということが見えてこないと、その強化のためには、やっぱり直営じゃないと駄目とか、さまざまところと連携するには、情報の共有というのも必要になるので、やはり職員同士でなければ共有できない情報というものもある。福祉関係の職員や保健関係の職員は日常的に各校を訪問したりもしているもので、例えば、情報共有をお互いにしながら継続的に支援をして

いきたいとなれば、やはり直営のほうがふさわしいとか、結論として、そういうところをもっていけないと、なかなか今のこの数字だけで話をしようとするのが難しい。

(丸田委員) 相談支援に関する基礎的な資料は蓄積をされているが、例えば、主訴別と年齢別にクロスをさせたらどう見えてくるのか。それから、主訴別とその人が抱えている問題をクロスさせたらどうなってくるのか。そこから、どれぐらい手間暇をかけているのかという支援の相談の回数を出していけばかなり見えてくるので、この「オール」に来ている相談について、少し幾つかの視点でもって整理をすることは可能か。

居場所のところにも同じことが言えて、これだけの延べ数があり、その延べ数の人数が実際どうなっているのかということ、ニーズと関係付けながら整理をしていくと説得力が出てくると思う。それを継続していくためには直営でないとか、あるいは強化をしていくためには直営でないという議論になるとわかりがいい。

(事務局) 「オール」のマンパワーは、本当にぎりぎりの状態でやっているのが実際のところで、相談業務と分析と方向性というのを全部一緒にやっている。相談をしながら、動向を見ながら、これからの流れとか今までの流れというのを一手にやっている。

資格を持っているスタッフもいれば、持っていないスタッフもいる中で、そこを何とか分析しながらやっとうとしていこうとしているが、足りない部分もあり、進めない部分というのは確かにあると思う。

そういった部分でこういうふうに分けたらいいとか、こういうふうに分けて整理していったらいいとか、助言をいただければ。

(田村委員) 最初の話の意図は、せっかくこんないいことをいっぱいやっているのに、もっと多くの人を利用したほうがいいのではないかというのが本心で、相談する若者が、このカードやリーフレットを見て、よし、行ってみようと思っていて、割と高いハードルを越えてやってくる。

支援が必要な若者や困っている若者は、自分から相談はなかなかできない。本校でも何とか気軽に相談できるようなシステムを作れないかということを考えて、スクールカウンセラーがいつ来ますとか、先生にいつでも相談できますといっても、自分から相談には来ない。

一番いいのは、保健室。気軽に相談できて、そこからの情報で、深刻になる前に未然に防げる。そんな保健室みたいな、どこか職員が常駐して相談に乗れるようなところをつくったらどうかと考えていたときに、お弁当を配達させてほしいという人が来た。目的は、それを通じて生徒と関わって、一人でも二人でも自分に相談してくれたらありがたい。生徒は本当に喜んでもらっていて、コミュニケーションがすごくとれる。いつも独りぼっちでぽつんとしているような生徒が、何げなく話をする。

自分の顔をさらして、二度も三度も学校に来て、何かおいしいものを持ってくる優しそうなおじさんがいるなどということがわかって、生徒た

ちの相談のハードルが下がったというのを感じた。

困っている生徒は本当におなかをすかせていて、定時制なので午後の授業に半分ぐらいの生徒しか出ないが、お昼を食べている生徒も、コンビニに行っている生徒もそんなにいない。食は支援が必要な苦しい生徒の心をつかむというのをすごく感じた。

(事務局) 平成23年の10月からユースクッキングを毎月やっていて、もう120回ぐらいになるが、去年、試行的にナイトクッキングという5時から夕飯を食べるクッキングをやった。今年もやっていて、参加人数は少ないが、非常に手応えを感じている。

お金はいただくが、300円で夕飯を作って食べる。5時という設定は、明鏡高校の生徒が、授業が終わった後に来てくれるかなとか、万代高校や南高校の生徒も勉強しに来るので、コンビニでパンを買ってくるぐらいだったら、同じ金額で食べられるかなとか、ここの卒業生で就労移行に行っている若者がいるので、4時ぐらいに就労移行が終わった後に、ここに来て一緒にご飯を食べられるかなとか、いろいろ考えて2年ぐらいやっている。ユースクッキングの手応えとしては、田村委員がおっしゃるように、非常にコミュニケーションがとれる。

若者に対しては、食事を提供するよりは、将来的に自分のパートナーや、家庭を持ったときに、自分の子どもたちに食事を準備できるようにしてやらなければならないと考えている。そういったクッキングの事業を通じて、一緒に作りながらのコミュニケーションも大事だが、将来、自分のためだけじゃなくて、誰かのためにご飯を作ってあげられるような若者になってほしいと考えている。

ユースクッキング、ナイトクッキングは、ユースアドバイザーもお手伝いに入っている。スタッフとユースアドバイザーの体制で行っており、調理室を貸していただければ、明鏡高校にも行く。

(伊藤委員) 今のお話も、子ども食堂も、地域の茶の間も、基本的に食を起点にして居場所の確保という意味でやっていると思う。相談、居場所、事業の3本柱が分けて考えられているという印象を受けているが、実は、この事業が全て居場所の確保になっているので、事業で何人集まりましたという説明をするのではなく、これによってどこかに行き誰かと関わるといことをやっていますと、いろいろ複層的にこれが膨らんでいますということが説明できるといいと思う。もう少し視点を変えて、単体で見るとはなくて、これはこんな効果がありますといことをいろんな枝を出して考えることができると、もっと事業の在り方や、方向性も見えし、その有効性もわかると思う。

(事務局) 最初に田村委員が、もっと人が多く来られるようにならないかというお話を出されて、今、相談の入り口についてはいろいろ議論をいただいたが、コロナ禍以前から参加者は減ってきている。居場所については椅子が余っているときもある。支援事業に関しては、参加する以前に居場

所で力を付けたい、ゆっくり過ごさなければならない人が増えているので、参加する人数がすごく減っている。

以前はユースクッキングもサポートステーションの利用者が来てくれて一緒にやったこともあるが、ほかのところにお声掛けをしたり、そういったこともできると考えている。コロナ禍が落ち着いたら、クッキングだけではなくて、明鏡高校の生徒にも何かご案内ができて、そこで若者と一緒に活動ができたらいいいし、生徒にしてみれば、ほかの社会資源を使って体験を積む機会になると思う。

(伊藤委員) 相談を見ていて思うのは、高校生、大学生が、30年前よりは随分幼くなってきていて、若者単体で支援をしようとする相談につながりにくいというのがあって、若者は困っていないけれども、親が困っているという方がすごく多い。30代になってもそういう人がいて、子育ての悩みを70代とか80代の親御さんがしてこられる。

(事務局) 保護者面談をしているケースもある。10代は保護者が来ないまでも、保護者と連絡をとりながら進めてく。基本、「オール」に本人が来られるということが大前提だが、最初は親御さんが心配で来られて、おうちの様子を聞きながら、親子で対応したケースや、親面談だけ続いたケースもある。

(伊藤委員) 医療機関でも、カルテが親には出ないので、親支援というのはできない。学校や公的なところだからこそ親支援ができると思う。症状が出ていない人の治療ということになるので、治療ではないが、支援ということになるので、地域ではなかなかできないと思うと、体制をどういうふうにしていくか。親も含めて家庭支援をして、それが若者の支援につながっていくという制度もご検討いただきたい。

(丸田委員) 意見を委員に求めるようなプロセスをご検討いただきたい。白紙の状態でも意見を求めてもいいし、例えば、相談支援について意見があればくださいでもいい。もしそういうプロセスをご検討いただけるのであれば、おそらく各委員からいろいろな意見が出ると思う。

(事務局) 検討する。

(5) その他

6 閉会

**【配布資料】**

- ・令和4年度 第1回 新潟市若者支援事業運営協議会 (レジュメ)
- ・令和4年度 第1回 新潟市若者支援事業運営協議会 資料1～7